

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	會田 千重
<p>[論文題名] Oxytocin levels and sex differences in autism spectrum disorder with severe intellectual disabilities</p> <p>雑誌名, 卷 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Psychiatry Research, 273,67-74,2019</p> <p>著者名 Chie Aita, Yoshito Mizoguchi, Miwako Yamamoto, Yasuhisa Seguchi, Chiho Yatsuga, Taisuke Nishimura, Yoshiki Sugimoto, Daiki Takahashi, Reiko Nishihara, Takefumi Ueno, Masahiro Nakayama, Toshihide Kuroki, Hiromi Nabeta, Yoshiomi Imamura, Akira Monji</p> <p>[要 旨] 【目的】重度知的障害児・者、特に自閉スペクトラム症（以下 ASD）を合併する患者の血清オキシトシン（以下 OXT）濃度と障害特性の関連・性差の調査。 【方法】肥前精神医療センターの 79 名の入院患者を対象に、血清 OXT 濃度と評価尺度（田中ビネー V または遠城寺式乳幼児分析的発達検査、ABC-J、CARS-TV、RBS-R）を測定した。 【結果】患者は平均年齢 39.53 歳（±11.65）、男性 50 名女性 29 名、うち 54 名が ASD を合併していた。性別や診断別（自閉スペクトラム症、てんかん）の血清 OXT 濃度に有意差はなく、年齢、知的能力、体重、BMI、各評価尺度合計得点と血清 OXT 濃度の相関はなかった。ASD 群で血清 OXT と各評価尺度下位項目に相関があり性差が見られた。ASD 群男性で RBS-R の自傷・同一性保持行動と血清 OXT に負の相関、ASD 群女性で CARS-TV の非言語性コミュニケーション・RBS-R の強迫的行動と血清 OXT 濃度に正の相関が見られた。 【考察】OXT 濃度と知的能力、自閉症特性の関連や、性差等について先行研究を参考に考察した。対象者が重度知的障害を伴い、女性も比較的多いことが本研究の特徴であった。 【結論】重度知的障害ではオキシトシンの機能に性差があること、重度知的障害を伴う ASD 患者でオキシトシンが反復的行動や非言語性コミュニケーションに何らかの影響を与えている可能性が示唆された。</p> <p>ABC-J（異常行動チェックリスト）； The Japanese version of the Aberrant Behavior Checklist. CARS-TV（小児自閉症評定尺度）； Childhood Autism Rating Scale-Tokyo Version. RBS-R（日本語版反復的行動尺度修正版）； The Japanese version of the Repetitive Behavior Scale-Revised.</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	迎 洋輔
<p>[論文題名]</p> <p>The addition of human iPS cell-derived neural progenitors changes the contraction of human iPS cell-derived cardiac spheroids.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Tissue and Cell, 61 頁-67 頁, 2018 年</p> <p>著者名 Yosuke Mukae, Manabu Itoh, Ryo Noguchi, Kojiro Furukawa, Ken-ichi Arai, Jun-ichi Oyama, Shuji Toda, Koichi Nakayama, Koichi Node, Shigeki Morita</p> <p>[要 旨]</p> <p>近年の研究で、神経前駆細胞が心筋再生において大きな役割を果たしていることが報告されてきたが、心筋細胞の自然凝集により作られた心筋スフェロイドにおける神経前駆細胞の役割は未だ解明されていない。本研究の目的は、心筋スフェロイドへの神経前駆細胞配合における拍動機能変化を明らかにすることである。スフェロイドはヒト多能性幹 (hiPS) 細胞由来心筋細胞に同じく hiPS 細胞由来の神経前駆細胞を種々の比率で配合し、凝集させることとした。拍動スフェロイドは全て連日動画で記録・計測され、収縮率を算出した。結果はまず、神経前駆細胞を混ぜない心筋細胞のみの群ではスフェロイド構築が不完全で、収縮率の算出が困難であった。一方で神経前駆細胞を配合した群の中で 30%配合群が最も収縮率は大きかった。その 30%配合群に蛍光免疫染色を行うと神経前駆細胞マーカー nestin に加え、神経線維マーカー(β3-tubulin, neurofilament medium chain)が陽性で、神経シナプスマーカー-synapsin1 も陽性であった。本研究で、神経前駆細胞の配合が心筋スフェロイドの拍動に影響し、さらに神経線維まで成熟しうることを示せたことは他に類を見ない。今回証明できなかったスフェロイド上の各神経マーカーの拍動へのメカニズムが解明され、より高機能かつ移植可能な三次元拍動構造体の作成に寄与されることが今後期待される。(596 字)</p>			

- 備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。
- 2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	山 道 淳 太
<p>[論文題名]</p> <p>Assessment of tumor volume and density as a measure of the response of advanced hepatocellular carcinoma to sorafenib: Application of automated measurements on computed tomography scans</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 JGH Open: An open access journal of gastroenterology and hepatology, Epub ahead of print, 2019.</p> <p>著者名 Junta Yamamichi, Yasunori Kawaguchi, Taiga Otsuka, Shunya Nakashita, Hideaki Mizobe, Yuichiro Eguchi and Shinya Kimura</p> <p>[要 旨]</p> <p>研究の目的 ソラフェニブ治療に対する進行肝細胞癌の腫瘍縮小効果の客観的評価手法として、放射線画像による腫瘍体積と密度の自動計測を行い、患者生存予測を向上させることを目的とした。</p> <p>方法 後方視的にソラフェニブ治療患者を抽出し、Child-Pugh 分類 A, Barcelona-Clinic Liver Cancer stage C, Eastern Cooperative Oncology Group performance status 0/1 の症例を評価対象とした (n = 22)。コンピュータによる自動計測機能を用いて対象患者の造影 CT 画像の評価を行った。得られた腫瘍体積と密度を用い、Kaplan-Meier 法及び多変量 Cox 回帰分析により、全生存期間について重要な予後因子を同定した。</p> <p>結果 腫瘍体積及び密度を指標とした場合、全生存期間中央値は、奏効群 (OR) (完全奏効+部分奏効) で、20.4 か月、非奏効群 (non-OR) (安定+進行) では、9.3 か月となった (p = 0.009)。また、生存期間に関する最適な多変量モデルは、腫瘍体積及び密度 (OR vs. non-OR) とベースライン AFP 濃度を有意な変数として持つ (ログ・ランク検定、p = 0.01)。その他従来 of 判定規準は、有意な変数ではなかった。</p> <p>考察 ソラフェニブは腫瘍内血流の低下作用があり、従来 of 形態学的評価のみでは、治療効果を十分に反映できない。また、病変の複雑な 3 次元的变化の 1 次元測定には限界がある。従って、腫瘍体積及び密度を指標とする本手法は、奏効の判定に優れていると考えられる。</p> <p>結論 自動計測機能を用いた腫瘍体積及び密度による指標は、進行肝細胞癌のソラフェニブ治療の腫瘍縮小効果を評価するための客観的手法となり得る。</p>			
<p>備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。</p> <p>2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。</p>			

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	磯田 広史
<p>[論文題名] Generation Gap for Screening and Treatment of Hepatitis C Virus in Saga Prefecture, Japan: An Administrative Database Study of 35,625 Subjects 佐賀県での C 型肝炎ウイルスのスクリーニング検査と治療における世代間格差：35,625 人のデータベース研究</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Internal Medicine.3248-19 (2019 年 9 月に Intern Med Advance Publication に掲載)</p> <p>著者名 磯田広史、大枝敏、高守史子、佐藤恵子、岡田倫明、高橋宏和、岩根紳治、江口有一郎、安西慶三、藤本一眞</p> <p>[要 旨] 【目的】 C 型肝炎ウイルス (HCV) 感染の有無を認識していない者が未だに多い。本研究は、i) HCV 感染者数と HCV スクリーニング検査の受検率、ii) 直接作用型抗ウイルス (direct acting anti-viral, DAA) 治療の受療率に関し佐賀県の世代毎の状況を評価した。 【方法】 2008 年 4 月 1 日から 2014 年 3 月 31 日までに医療機関または職場で実施した HCV スクリーニング検査と、2014 年 10 月から 2017 年 3 月に DAA 治療のために申請された医療費助成制度のデータを、佐賀県行政データベースから取得した。 【結果】 HCV スクリーニング検査は 35,625 人が受検しており、HCV 陽性率は 1.18% (421 人) で、陽性率は年齢と相関して増加した。世代毎に受検率を見ると、45~74 歳でピークに達し(約 6%)、若い世代と超高齢者で低下した。DAA 治療の推定割合は、65~74 歳(65.8%)でピークに達し、若い世代で減少した。20~34 歳の年齢層で HCV 陽性者の 9.4%が DAA 治療を受けていた。HCV スクリーニングで陽性と判明した場合に DAA 治療のために精密検査を受けた割合は、職場健診よりも医療機関で判明した方が高かった。 【結論】 佐賀県では特に若い世代で、HCV スクリーニング受検率と DAA 治療受療率が 45 歳~74 歳と比較して低かった。若い世代を対象とした肝炎対策の推進を図るべきである。</p>			
備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。 2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。			

論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	今村 義臣
<p>[論文題名]</p> <p>An association between belief in life after death and serum oxytocin in older people in rural Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 International Journal of Geriatric Psychiatry, 32, 102-109, 2017</p> <p>著者名 今村義臣, 溝口義人, 鍋田紘美, 原口祥典, 松島 淳, 小島直樹, 川島敏郎, 山田茂人, 門司晃</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的: 宗教性は, コルチゾル等の生化学的指標でみた場合, 心身の健康に良い効果をもたらすことが多数報告されている. また, 宗教的信念の 1 つである来世信念は, 心身の健康と正の関連がある. しかし来世信念と下垂体ホルモンの 1 つである oxytocin (OT) の関連を調べた研究は殆どない. 末梢 OT 濃度は, 絆や社会関係におけるストレス調整の程度を反映するとされ, 来世信念が死者と残された人との関係性を前提とするのなら, 来世信念に関わる脳神経回路に OT が関連している可能性がある. ここでは, 来世信念と OT の関係を調べ, 来世信念に関わる脳内機序と愛着や絆のそれとの類似性について議論する.</p> <p>方法: 正常な認知能力を持ち精神的疾患の無い地域在住の 65 歳以上の高齢者 317 名が分析の対象となった. 調査では, 生活情報 (年齢, 性, 教育等), 心理検査 (来世信念, ウェクスラー記憶検査論理記憶等), および採血を行った. 血清 OT 濃度は ELISA 法を用いて定量化した.</p> <p>結果: OT は, 男性よりも女性において高く, また, 年齢, 性, 記憶, 教育の調整後, 来世信念と負の関連がみられた.</p> <p>結論: OT は置かれた状況により不安の惹起・抗不安のいずれにも関連することが言われている. 本結果は, 来世信念が強い人ほど OT が低く, 不安が高いと解釈できる一方で, 人間関係における悲嘆が低いほど OT が低いという研究が示唆するように, 来世信念が現世での人間関係における不安を低減しているという解釈もできる.</p>			

備考 1 論文要旨は, 600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	坂西 雄太
<p>[論文題名]</p> <p>Public subsidies and the recommendation of child vaccines among primary care physicians: a nationwide cross-sectional study in Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 <i>BMJ Open</i>. 2018 Jul 19;8(7):e020923. doi:10.1136/bmjopen-2017-020923. 2018 年</p> <p>著者名 Yuta Sakanishi, Yosuke Yamamoto, Megumi Hara, Norio Fukumori, Yoshihito Goto, Tesshu Kusaba, Keitaro Tanaka, Takashi Sugioka, Japan Primary Care Association Vaccine Project Team, Shunichi Fukuhara</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 小児ワクチンの接種率向上には公費助成と医師からの接種推奨が重要だが、これらの関連については不明である。そこで日本のプライマリ・ケア医 (PC 医) を対象に、インフルエンザ菌 b 型 (Hib)、小児用肺炎球菌 (PCV)、ヒトパピローマウイルス (HPV) 各ワクチンの助成の知識と接種推奨の関連性の検証を目的として研究をおこなった。</p> <p>【方法】 無作為抽出された日本プライマリ・ケア連合学会に所属する医師 3000 名に対して質問紙調査を実施し、小児ワクチン接種を実施していると回答した者を解析対象とした。医師が各ワクチンの公費助成の存在を知っていることを主な要因、医師が各ワクチンの接種を被接種者・保護者に推奨することを主なアウトカム指標として多重ロジスティック回帰分析を行った。</p> <p>【結果】 各ワクチンについて助成の知識がある医師および接種を推奨する医師の割合、助成の知識と接種推奨の有無との間の関連性は、①Hib ワクチン: 75%、57%、関連性あり (調整オッズ比 (AOR) 4.38, 95%信頼区間 (CI) 2.58-7.43)、②PCV ワクチン: 72%、54%、関連性あり (AOR 4.97, 95%CI 2.89-8.54)、③HPV ワクチン: 90%、58%、関連性あり (AOR 4.17, 95%CI 2.00-8.68) であった。</p> <p>【考察】 PC 医が公費助成の存在を知っていると、有意にワクチン接種を勧める傾向にあることが明らかとなった。PC 医への助成制度の周知により、接種を推奨する医師が増加する可能性がある。</p> <p>【結論】 対象とした全てのワクチンで助成の知識と接種推奨との間に有意な関連を認めた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。